

インクルーシブな聴覚障害児童・生徒のための障害認識教材の開発 —ライフスパンを考慮した取り組み—

鳥越 隆士
(兵庫教育大学)

<要 旨>

本研究では、通常学級に在籍する聴覚障害児のための障害認識に関する教材開発を行うことを目的とした。まず通常学級に在籍経験のある成人聴覚障害者に学校時代の体験談を語ってもらった。経験は多様であるが、いずれも学校生活（授業や友達関係）でのコミュニケーションの不全感が語られた。思春期に心理的な葛藤が経験するが、大学等で手話に出会い、コミュニケーションの改善とともに、それまでの「曖昧さ」を障害として深められた。その際、過去の自分や処遇に対する怒りや憤りの体験を語る者も多くいた。その後周りとの関わりの中で「聞こえにくさ」が「違い」として認識され、自分らしさも模索するようになった。さらに、教材のニーズや内容に関する調査を行うため、難聴学級で成人聴覚障害者との交流を実施した。聞こえの多様さ、学校時代の体験談、現在大切に考えていることについて語られた。これらにより「聞こえにくさ」の多様性を認識したり、児童生徒の普段の生活を振り返ったり、将来の肯定的の見通しを与えたりできることが示唆された。

<キーワード>

聴覚障害児、難聴学級、インクルージョン、障害認識、語りの分析

【はじめに】

本研究は、通常の学校に在籍する聴覚障害児童・生徒のための障害認識の発達を支援するための教材の開発を行うものである。我が国では現在、デジタル補聴器や人工内耳などテクノロジーの進歩によって、通常の学校に在籍する聴覚障害児が増えつつある。ただ聾学校での手厚い専門的な教育環境とは異なり、たとえ聴覚の活用が可能であったとしても、学習、周りとのコミュニケーション、心理的な成長という3つの領域で多くの課題を抱えていることが報告されている（美濃・鳥越、2007）。

本研究は、この中で心理的成長（障害認識や自己理解）に焦点を当てる。通常の学校では、十分な専門性が確保されていないこと、また指導や支援としても聴覚管理や学習の遅れの補

充が中心であることから、心理的な成長への支援まで踏み込めていない。近年「自分の聴力を計ってみよう」「周りの音調べをしよう」など障害理解教育の試みもなされつつあるが、取り組みがなお断片的であり、また将来を見越したライフスパンの観点が十分でない。自分の障害や自身を肯定的に捉え、積極的にまわりと関わっていきけるような「生きる力」を身につけるためには、通常の学校に在籍する聴覚障害児童・生徒にとっても障害認識の取り組みが不可欠であろう。

本研究は、このような観点から、通常の学校に在籍する聴覚障害児童・生徒の障害認識の発達を支援するための教材を開発するものである。具体的には、まず通常の学校に就学経験をもつ成人聴覚障害者の体験談を収集し、ライフ

スパンの視点から内容の分析を行う。さらに難聴学級での成人聴覚障害児と児童・生徒との交流を実施し、教材開発のためのニーズの分析を行う。以上に基づき、障害認識の発達を支援するための教材開発を試みる。

【研究方法】

1、語りの収集と分析

対象者： 通常の学校での就学経験を持つ成人聴覚障害者 6 名（20 歳代から 30 歳代）。聴覚活用や手話の活用、家庭環境、社会環境など、できるだけ多様な対象者を選んだ。

手続き： 学校での経験を中心に、語ってもらった（1 時間程度）。語りは、文字に書き起こし、オープンコード法により、質的に分析した。それによって障害認識に関する教材を構成する要素（テーマ）を抽出した。

2、難聴学級での児童生徒との交流

対象学級： A 市小学校難聴学級。在籍児童は 10 名（1 年生から 6 年生まで）。

手続き： 難聴学級の「自立活動」の時間に、成人聴覚障害者に学校での体験談を話してもらった。対象児童との対話や関わりを分析し、体験談や交流がどのように児童の障害認識のきっかけとなるかを、事例的検討する。

【結果】

1、語りの収集と分析

A：20 歳代の女性。重度難聴であるが、小学校、中学校は難聴学級に在籍した。その後、高校、大学へと進学している。A は、これまでの成長の過程を時系列に沿って語った。語りは、大きく分けて、小学生時代、中学生時代、高校時代と第一の爆発、大学時代と第二の爆発、氷

河期、今思うことの 6 つの部分からなっていた。

小学生時代では、家庭での音に関する指導、学校での先生の話（ただ座っているだけ、先生の言葉はパズル）、友達関係（3 年生くらいから女の子の集団について行くのが難しくなった）について語られた。

中学校では手話に出会う（聾学校の友人）が、音楽の授業での先生への反抗、授業での読み取りの困難とあきらめなどが語られた。また友達関係が持てないため、空想の世界（花子さん）に浸っていたエピソードが語られた。

高校では、それまでの難聴学級であったような支援がなくなり、また学校でも聴覚障害が本人一人となった。授業での指名がなかったり、同級生から「外国人？」と聞かれたり、精神的に追い詰められた経験が語られた。同級生の心ない発言に 1 回目の爆発があった（ワーッとなった。何かが切れたんです。なんで我慢せなあかんの）。教師の支援がなかったこと（どうして先生は気づいているはずなのに、何も言ってくれないんだろう？）から、ショックを受け、気持ちを「封印」してしまった（考えないようにしていた。考えたら自分の気持ちがやりきれない。ワーッとなったら周りに迷惑がかかる。周りに伝えても何も解決しないと思っていた）と語られた。ただ放課後、知り合った聾学校の友達との手話による交流が楽しみだったとのこと。

大学時代に本格的に手話と出会い、手話やノートテイクによる授業サポートがあり、また聴覚障害学生同士の関わりが生まれた。ただ聞こえないことよりも、コミュニケーションの不全感から（きっかけは、聴覚障害学生の先輩から、「おまえはコミュニケーションが取れない」と

指摘された)、第二の爆発があり、それをきっかけに、「氷河期」(社会的状況からの撤退)に入る。本人は第一の爆発は、他者に対してであるが、第二の爆発は自身に対してのものであり、これをきっかけに自己理解が進んだと振り返っている。聞こえないことや手話でわかることだけでなく、その底流として、コミュニケーションができる、話し合いができる、話し合いに基づいて、主体的に決めたり、行動したりすることが大切と気づく。そこで、本人は「生まれ変わった」と発言し、それ以降社会に対して、積極的に関わることができるようになったと語っている。最後に教育に対する思いが語られた。

B: 30 歳代男性。手話と出会ったのは、20 代後半で、学校時代には、手話には出会ってなかった。

小学校は初め通常の学級に在籍していたが、途中成績が落ちてきたことから難聴学級に変わっている。聞こえの違いに関して気づきはあったようだ。いくつかエピソードが語られた。例えば、遊んでいるとき、友達の話が分からなかった。「何しゃべっているの?」と聞くと「いや、何でもない」と言われたこと。友達に聞き返すことが多かった。たいてい答えてくれたが、時々面倒なのか、何でもないとわれ、少しずつ疎外感を感じてきたようだ。

中学校は家族の関係で、引越しし、通常の学級に入った。先生と母親が相談して、みんなの前で自分が聞こえないことが伝えられたが、これには抵抗があったとのこと(配慮はうれしいけど、特別なのが、うーん)。中学では、友達を作るのが難しかったとのこと。仲のよくできそうな友達が見つかる、いろいろ聞いたりし

しゃべったり努力したが、結局あまり友達がいなかった。難聴生徒だけ集まる交流会のようなものがあった。そこで初めて自分と同じような生徒がいることを知った。楽しかったが、月 1 回程度でそれほど交流は深まらなかった。

高校も通常の高校。このときは特に積極的に友達を作ろうと努力はしなかった。「僕はできるだけ深く考えないようにしようとしていた。深く考えると、何だろう…いろいろと悩むし、病気になりそうで怖いから、まああまり考えないようにのんびりしよう、そんなふうに自分を守っていたのかもしれない」と語っている。また家族に対しては、「でも親に心配かけたくないから、帰っても黙っていた。楽しかった?」と聞かれても、楽しかったと答えていた。みんな健常者だから、言える勇気がなかった。自分で黙って処理したらいいって無理に解決していた」と語っている。学校生活で一貫して、不安全感を感じつつも、心理的な葛藤は顕在化させずに学校生活を送ってきたと言えよう。

それから仕事に入っているが、周りとのコミュニケーションの難しさから、職を転々としている。ただ 20 代後半に手話と出会っている。その時の印象を、「(聾者を) 見ることはあっても、実際に会って挨拶をしたのは初めて。手話を使ってみんな話す。表情も楽しそう。みんな聾だけでしゃべって、楽しそうに会話ができる。視野が拡がり、目覚めた、楽しい気持ちになった」と語っている。その後、手話を覚えて、視野が拡がり、考え方も変わった、一番大きいのは、自分の考えも持って行動できるようになったと振り返っている。

C: 30 歳代後半の男性。重度の聴覚障害を持つ。学校時代の困難なこととその対処が語りの

中心であった。

小学校では、難聴学級に在籍。同学年で聴覚障害児童が1人だったため、1対1の授業が多かった。ただ難聴学級の担任の質の問題、1人学級の弊害などの理由により、4年生から通常学級在籍となる。バス通学で運転手に話しが通じなかったこと、友達の遊びに入れなかったこと、補聴器に関していじめられたこと、標準語で言語指導を受けていたため、周りとのコミュニケーションで浮いていたこと（そのため、わざわざ関西語も学んだ）ことなどのエピソードが語られた。否定的な経験の語りが多かった。これらの問題は、母親と学校との話し合いで解決されたようだが、本人の関与や自覚、障害認識を促すような取り組みはなかったようだ。一方、難聴学級に関しては、通常学級からの逃げ場（居場所）になっていたこと、難聴学級の上級児童と一緒に遊ぶなど深い関わりを持つ（口話のみであったが）ことができたことなどが語られた。

高校以降、そのような逃げ場がなくなり（学校で聴覚障害生徒も1人）、辛かったと話している。ただ、担任の先生が、友達とトラブルを起こした時、きちんと向き合ってくれたり、日々の愚痴も聞いてくれたりして、きちんと対応してくれたとのこと。これを契機に教師になりたいと思うようになったことが語られた。

手話に出会ったのは、大学時代。手話がないと講義の理解ができない状態だった。聾学校出身の友達から手話を学んだとのことであった。

D：30歳代後半の女性。重度聴覚障害を持つが、小・中と難聴学級でなく、通常学級に在籍。小学校でのエピソードとしては、入学式の時、2人ずつ手を繋ぐよう言われたが、話が分から

ず、1人だけで寂しく座っていた、授業では全く配慮がなく、例えば、先生の言葉を書き取るテストも全く聞こえずにできなかった、先生も聞き取りができないことが理解できていなかった、周りの行動を見て、その時々動いていた等の語りがあった。また親も子も頑張るということで普通学級に来ているので、周りも特別扱いしないとの方針で、「覚悟を決めていた、母も仕方がないと思っていたらしい」とのことであった。ただ本人は、特に低学年の間は、友達とは（ルールも分からず）その時その時で遊んでいて、はっきり困ったという自覚はなかったようだ。また新しいことは、最初にやらずに後についてみんなと同じことをするというような対処法も自然と身に着けていたとのこと。

一度、友達からいじめられて、泣きながら親に訴えたとき、親も一緒に泣いたので、びっくりした、それからは親が傷ついたりしないように、何かあっても親に報告しない、苦しませたくないからというエピソードも語られた。その中で、同じ学校に通う姉にはいつも言うことができ、また学校での振る舞い（例えば、友達の作り方）も姉を通して学ぶことが多かったようだ。

中学・高校と困り感は継続していて、心理的な葛藤も感じていたが、ただ学業に意義を見出し、「授業は分からないが、教科書を繰り返し読んで勉強した、テストもよかったので、教師や両親は心配しなかった」との語りもあった。高校を通して、テストで1番になること、いい大学に行って、いい仕事に就くことが目標になっていたようだ。大学で聞こえない人にたくさん出会って、「自分に対して妥協して楽になった」と語っている。その頃に手話とも出会って

いる。

E：20代の女性。中等度難聴であった。一貫して、通常学級に在籍（小学時代のみ、通級指導教室に通っていた）。語りは、小学時代、中学・高校時代、大学時代と手話の出会い、葛藤と怒りの体験、「違い」の発見の5つに区分できた。

まず小学校時代、いつも聞く意識が必要だったこと、状況によって聞こえが違うこと、ただ聞こえにくさが周りにも自分にも十分に意識されていなかったことが語られた。特定の発音の難しさがあったが、訓練を受けて、自分で発音はできるようになったが、相手の発音は相変わらず聞き取れなくて、そのことでコミュニケーションの誤解を生むことがたびたびあったと振り返っている。通級指導教室では、いつものように緊張して、聞き取ろうとする必要がなかった（時に聞き取れなくともとがめられなかった）、ほっとできたが、その反面、難聴児同士のコミュニケーションが難しく、ここでも深い関わりができなかったと語っている。そのため中学校以降では、通級指導教室に通うのをやめている。

中学・高校時代は、部活に励んでいて、そこに楽しさや生きる意味を見出していたが、日常では、分からなくとも、わかったふりをする、自分をごまかすことが日常的になっていて、困ったことが起こると自分ができないからだめなんだと、「聞こえにくさ」を自己否定に結びつけていた。

大学で手話に出会い、学び始めている。これは当初、自分のためでなく、同じ大学にいる聾者とコミュニケーションをとるためと語っている。ただその後手話通訳による講義保障で、

講義内容が格段理解できることが分かり、他人のためでなく自分のために手話を学ぶようになる。このとき、過去の「曖昧な」ままいた自分や周りとの不十分な関わりを振り返り、辛く感じ始め、さらに周りに対して怒りをおぼえるようになってきた（今まで、同じ学費を払ってきて何も分かっていなかった。今までずっと曖昧な世界で生きてきた。一方、聞こえる人は完全に分かる世界にいる。今までの20年間何だったんだろう。聞こえる人は息を吸うように聞くことができる。自分はいつも意識して一生懸命聞かないといけない・・・）。

この怒りや憤りを体験して、それを周りに投げかけるようになり、また周りの友人たちにもそれを受け止めてもらい、「聞こえにくさ」を否定的でなく、違いとして受け止められるようになってきたと語る。「手話を使うろう者、聞こえる健聴者、多様な聞こえ方をする難聴者と聞こえに関する違い、違って当たり前、違うということをお互いに認め合って、話ができる、そう考えるようになり本当に救われた」と語っている。また「対等に語れるからこそ、相手のことをもっと知りたい、相手に近づきたいと思うようになった」とも語っている。

F：30歳代の女性。家族は両親とも聴覚障害者で、家庭の中では手話を使用していた。祖母が健聴者で、学校など音声言語の世界と彼女を結びつけていたようだ。

障害の発見が遅れた。それから聾学校幼稚部に通い、また家庭でも祖母が発音や言語の指導に当たっていた。小学校の難聴学級に入学。手話を使う自分と手話に拒否的な他の難聴児の間に距離を感じていたが、もともと積極的な性格で、周りに手話や指文字を広める努力をして

いたとのこと。勉強が好きで、自分からどんどん学んでいくので、特に困ったことがなかったようだ。先生に対しても、耳が聞こえないので、いろいろな要望を出していたそうだ。

中学でも難聴学級に在籍したが、1人学級だったこともあり、途中で通常学級に変わった。好きな歌手が同じということのをきっかけに親しい友人を作ったり、勉強も自分で行って（通信教育で先回りしていた）、特に問題を感じていない。

高校1年のとき、先生と仲が良かったり（耳が聞こえないため、ノートのコピーなどいろいろな要望を出していた）、性格が積極的だったりした（自己主張が強い）せい、いじめに会うようになる。このとき精神的に落ち込んでいたようだが（聾学校への転校も考えた）、2年生でクラス替えがあり、また好きな歌手が同じことがきっかけで友人を持ち、以降、友達関係が良好となる。指文字や手話を覚えてくれ、またその友達を通して、聴者の文化を学ぶことになる。本人も「両親が日本手話だけなので、声の文化も知りたい」と語っている。「ろう同士では、手話で楽しむ。聴者の友達とは、口話で楽しむ。2つの世界を行き来するのが好き」と自身の現在の生活を振り返っている。

2、難聴学級での交流の分析

語り手は、3つのテーマについて、難聴児童に語った。1つはコミュニケーションについて、2つは小学校での障害に関わるエピソード、3つは小学以降で体験した出会いである。

授業は、児童と対話的に進行した。1つ目のテーマについては、コミュニケーションの多様さである。語り手は、口話と手話を使用しているが、対象者に応じて、筆談なども使用してい

ることを具体的に語った。難聴児童が通常学級でどのようなコミュニケーションを行っているか、また難聴学級での児童同士のコミュニケーションの難しさがあるが、その課題について振り返りを行うことができた。

2つ目のテーマについては、小学校での障害に関わる様々なエピソードが語られた。理科の実験で、先生の説明が十分に理解できなかった故の不安、音楽会の器楽演奏で実際に音を出せなかったこと、通常学級での難聴児同士の読話による私語、バスケットボールの試合で、味方のチームの制止の音が分からず、相手側のゴールに入れてしまったことなど語られた。いずれも難聴児童の日頃の経験と重なるエピソードであり、その経験の背景にあるものや対処方法について、深めることができた。

最後に、語り手が現在の生活を支えている3つの出会い（手話、ノートテイク、街頭での写真を通じた聴者との交流）について語られた。これらのことにより、今後の人生への肯定的な見通しを難聴児童に与えることができたように思われた。

【考察と今後の展望】

本研究は、通常学級に在籍する聴覚障害児童・生徒の障害認識を支援する教材の開発を目的に、成人聴覚障害者の学校生活での経験の収集と分析及び小学校難聴学級での成人聴覚障害者との交流による教材ニーズの分析を行った。以上の分析を通して、3つの点が明らかになった。

まず第1に、聴覚障害者の人生経験が多様であることである。聴力レベルはもとより、友達関係、学校での授業の理解の程度、学校での否

定的体験とその対処、肯定的体験、手話や他の聴覚障害者との出会いなど、実に多様であった。このことから様々な「障害認識」への道筋と方途を考慮する必要があることが示唆された。今回は、6名の成人聴覚障害者のみ語りを収集分析したが、さらに多くの経験を収集し、より包括的な枠組みを明らかにすることが必要であろう。特に、多様な聴覚障害者像を具体的に提供することは、障害理解教育において、ステレオタイプなイメージを押しつけることを防ぐ。またこのことは、聴覚障害児たちにとって、様々な聴覚障害者と出会うことにより、自分の固有な体験の意味づけとより具体的に対処方法の検討、さらに自己理解を深め、「自分らしさ」を発見することの契機ともなるであろう。また生き生きとした成人モデルに接することにより、自分のより具体的な、しかも肯定的な将来像をイメージしやすくなるのが、難聴学級での成人聴覚障害者との交流でも示唆された。

第2に、多様であるにもかかわらず、いくつかの共通する「障害認識」に関わるテーマが見出された。コミュニケーションの不全感（授業での困難さと工夫、友達関係での難しさ）、否定的な自分、学校生活で生き生きとできたこと、心理的な葛藤（怒り、憤り）と行動化、手話との出会い、聞こえにくさの多様さ、自分らしさの発見などである。特に手話との出会いと対等なコミュニケーションの体験、それを通じた自己理解や障害認識の深まりが特徴的であった。またその際の心理的葛藤（過去への怒り）の体験も共通していた。新しい自分の再構築のために、過去の体験に関して「喪の作業」を行うことが必要なのかもしれない。ただ、現実には手

話との出会いを経験していない難聴者も多にいる（藤巴、2002）。そのような難聴者へも語りの収集を広げ、自己理解や障害認識の契機に関するより包括的なビジョンを構築が必要であろう。

上述のことと関連して、第3点として、さらに障害認識の発達（変化）段階に対応した教材の開発が必要であろう。同時に、障害認識の発達段階の対応した支援モデルの構築も必要である。ただ本研究では、多様性は見いだせたが、発達段階に関しては十分に明らかになっていない。今後の研究課題である。

今後は、収集した映像素材を整理、編集し、「難聴者は語る」（仮称）として教材化を行いたい。また映像教材をもとに副読本（試行版）を制作する予定である。制作したものは可能な範囲で公開するとともに、これらの教材を活用した授業の在り方についても検討したいと考えている。

引用文献

- 藤巴正和（2002）難聴者の障害受容家庭に関する一考察 ろう教育科学、44(1)、13-23.
美濃孝枝・鳥越隆士（2007）インテグレーションをしている聴覚障害児童・生徒に対する支援のあり方に関する調査—本人の語りからの分析— ろう教育科学、49(2)、47-66.